

漢法苞徳塾資料	No. 023
区分	診断・瘀血
タイトル	瘀血の診察（補足）
著者	八木素萌
作成日	1994.04

★『鍼灸心悟』の105ページに、瘀血の三焦（温病論的な）での所在の判断に関する記述がある。
非常に参考になるので、翻訳して紹介する。

★「行間行瘀可破血結之証」（原文）

訳…行間には瘀血部の血流を改善して、そこでの瘀血によって梗結を生じている証を、梗結を排除する効果がある。

「浅积…人身之血内注五臟六腑 外養四肢百骸 若血瘀上焦 髮脫不生 肩臂胸膈刺痛。血瘀中焦 胃脘兩脇腰間刺痛 四時無力。血瘀下焦 腹滿刺痛 大便黑 小便淋。瘀于臟腑經絡之間 則生癥瘕積聚 皮膚甲錯。肝藏血 肝氣失調 則血易瘀 肝氣条達 則血無凝瘀之慮。行間為足厥陰之脈 所溜為榮 祛瘀通絡 泄火郁通血脈。

附方 肝氣不舒 胸脇刺痛取 行間 支溝 中脘 陽陵泉 」(原文)

訳 注釈…人身にあって血というのは、身体の奥にあっては五臟六腑に注いでおり、身体の浅い部分では手足その他の身体全体を養っているものである。もし血が上焦で瘀となった場合には、髪が抜けて生えてこない、肩や臂や胸にトゲが刺さったような痛みがおこる。血瘀が中焦にあるような場合には、胃のあたりや両の脇から腰にかけて刺痛を感じいつも力が入らない。血の淀みが下焦に生じると、腹が張満し、大便の便色が黒い、小便はタラタラの出しぶり状態になる。臟腑組織と經絡との間の部分に血の淀みが生じると瘕や積聚となってゆき皮膚は甲錯して行く。肝は「藏血」の臟であり、これが失調すると血は「瘀」になりやすい、肝の条達という機能が良いと血が淀みを引き起こして瘀になる心配が無くなる。

行間…瘀を^{のぞ}き通絡する。火郁^{かうつ}を泄らして血脈を通ずる。などの効能がある。

配穴処方…肝の機能が^{のび}舒やかで無い、胸脇に刺痛がする（場合に）行間 支溝 中脘 陽陵泉（などの諸穴を配穴する）

◇訳者註……

- [1] 瘀…字の原義はもと「淤」の義の「水などの底に沈殿したおり、たまったかす」「とどこおりよどんだおり」「はきけをもよおすよども」などに通じ、更に転じて「ふるち」「ふるちからおこる病気」「血がにごりつかえておこる病気」を現わすものとして「サンズイ」に代わって「ヤマイダレ」の文字となったもの。瘀血・瘀・血瘀などと表記する場合が多い。
- [2] 上焦・中焦・下焦…古くは身体の部位を示すもの『難経』には横隔膜より上部、横隔膜より臍までの中部、臍より下の部分(18)とされており、上焦は「主納」中焦は「腐熟」下焦は「主出」つまり嚥下吸収の機能(上)・消化(中)・排泄(下)の機能がある(31)と記述している。後に『温病論』の成立に伴い意味が拡張されて、各焦に五臓六腑が配当されるようになった。
- [3] 臂…ヒジと訓まれるが、肘と前腕部をさしている。
- [4] 胸膈…膈は横隔膜を意味しているが、胸部全体をさして言う。
- [5] 刺痛…『靈枢』九鍼十二原第1に刺の字をトゲが刺さるトゲの意味で用いている。これを刺痛として表現している。
- [6] 胃脘…俗に言う「胃のアタリ」の意味、上脘の別名として胃脘と言うが此处では「胃のアタリ」上腹部を指している。
- [7] 腹満…腹脹満と言う場合もある。腹が膨満している状態
- [8] 瘀于臟腑経絡之間 則生癥瘕積聚…『素問』「腹中論第40」「举痛論第39」などに「寒気客於小腸膜原之間・絡血之中」「寒気客於腸胃之間・膜原之下」のような積聚成立に関する表現が見られ、『難経』「28・29・55・56 難」に積聚や疝や癥に関する記述がある。これらの記述をふまえた論と見られる。
- [9] 皮膚甲錯…サメ肌、タコなどの皮膚が病的に肥厚しカサカサした状態。
- [10] 条達…ノビノビすること、ノビヤカなこと
- [11] 凝瘀…凝集して瘀になって行く、または、瘀が凝結となったもの。
- [12] 通絡…絡にはつながり道、通り抜け道、つないでいるもの、まとう等の意味がある。ここでは通りを良くするぐらいの意味に用いている。
- [13] 火郁…郁は鬱に通じている、此处では同義になっている。「火」は五行では熱であり暑であり五臓では「心」を指している。故に「熱鬱」と同義。
- [14] 血脈…中国医学では「脈」と言う場合には「経脈」を意味している場合が多い。血管を指す場合には、このように表現する。